TOPIC 2

国境を越える文化遺産 登録へ向けた国際協調

国境を越える文化遺産には、「面」のものと、「点」として複数国に点在しているもの、「線」として国境をまたいでいるものなどさまざまである。また、サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路のように、価値も歴史も同一の性格を持ちながら、個々の遺産として登録されているものもある。ここでは、それらのなかで特徴的な遺産と、国際協調の上で、効果的な取り組みが行なわれている遺産、そして課題を抱える遺産を紹介する。

東京大学大学院教授　西村幸夫
東京大学大学院工学系研究科　西川亮

©PPS通信社

リトアニアとロシアの飛び地にまたがるクルシュー砂州は、長さ98km、幅400m～4kmにわたる砂丘の半島。先史時代より砂州の侵食と人々は戦ってきた。

「面」の象徴。一歩一歩協調体制を整える「クルシュー砂州」

地続きの「面」でつながる文化遺産として初めて、リトアニアとロシアの2カ国同時申請により登録されたのが、「クルシュー砂州」だ。バルト海とクルシューラグーンを隔てる全長98kmの長い砂州で、その中央を国境が貫いている。

有史以前から厳しい自然環境を戦いぬいてきたこの地域は、国こそ違うものの、置かれた環境も乗り越えるべき課題も同じである。国境を越える遺産として、ともに課題に取り組むことの重要性を、初期の段階から認識していたのである。

クルシュー砂州は有史以前からの生活が存続する稀有な地域である。この地域は、人々の生活が、激しい風や波などによる自然の破壊力や、森林伐採などによる人的開発によって脅かされてきた。それらの問題を抱えながら、人々が築き上げてきた文化的景観が、独特の文化を特徴づける伝統的居住形態を示し、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本であるとして（登録基準v）、2000年に世界遺産に登録された。

それまで国境を越える文化遺産は、まずどちらかの国が世界遺産として登録され、後に範囲の拡大により、別の国が登録されるケースのみだった。しかし、クルシュー砂州は、登録時から2カ国同時に国境を越える遺産として登録された。

しかし、登録申請の際、リトアニアとロシアは、両国が共同で世界遺産に登録されることが、「破壊されやすい景観の効果的な保全方法である」としながらも、登録にあたって共同で歩調を合わせることはできなかった。

そこでICOMOS（国際記念物遺跡会議）は、特に観光管理計画の策定を主軸に、両国共同の管理計画を提出することを求めた。世界遺産委員会も、数回にわたって、リスクアセスメントや不慮の緊急事態に備えた、相互計画の策定を求めた。その結果、登録から5年後の2005年、両国それぞれから、緊急事態に備えた協力計画の草案や環境影響アセスメント後のアクションプランの提案がなされた。徐々に協力体制が整い始めた兆しである。

それでも、バルト海、特にクルシュー砂州の文化的景観の管理や、構成資産全体の管理計画、観光戦略にかかわる計画に関してはまだまだ不十分な点が多く、共同委員会によるさらなる成果が期待されている。

点でつながり、拡大していく「ローマ帝国の国境線」

イギリスとドイツの「ローマ帝国の国境線」は、そもそもイギリスの世界遺産であったものが、範囲の拡大により、ドイツの資産を含み、さらに、イギリスの別の資産を加えて、拡大している。範囲拡大によって「点」の遺産が国境を超えていく顕著な例である。

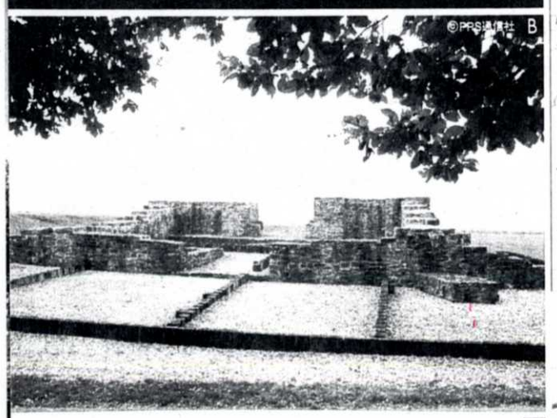
また、両国が共同で推薦文を提出したことで、登録が実現した例でもあり、今後も複数の国々を巻き込み、発展していく兆しを見せている。

西暦2世紀に最盛期を迎えたローマ帝国は、北ヨーロッパから中東、アフリカまで絶大な勢力を広げていた。ローマ帝国の国境線は、その勢力範囲を示す遺産群であり、まず、イギリスの「ハドリアヌスの長城」が単独で世界遺産に登録された。1987年のことである。その後、ヨーロッパ内で、遺産の拡大登録への関心が高まるなか、イギリス政府とドイツの州が協力し、2005年にはドイツのリーメスの登録を実現させた。リーメスとは、ドイツ北西のライン川から南東のドナウ川まで550kmに渡る城壁や要塞などを指す。このときリーメスは、ハドリアヌスの長城の拡大登録として位置づけられ、登録名は「ローマ帝国の国境線」に変更された。2008年には再度、範囲が拡大され、イギリスのアントニヌスの長城も加わった。

これらの背景には、2003年にイギリスやドイツをはじめとする欧州5カ国によって創立された「プラチスラバグループ」の存在が大きい。このグループは、ローマ帝国の境界線のすべての資産を世界遺産として登録するための体制作りを目的としている。ローマ帝国の境界を持つ国々に対し、その歴史的重要性を示すとともに、遺産管理のためのガイドラインの作成、研究調査やデータベースの作成などを働きかけている。また、今後もその他の国々やICOMOS、世界遺産センター関係者にも参加を促し、遺産の全体的な管理計画を策定する予定である。

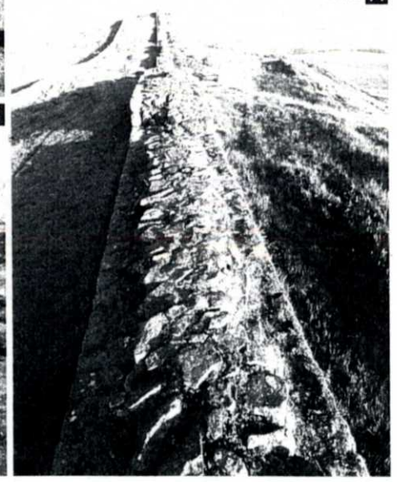
時代を超えて、建築や技術、都市計画などの発展に大きな影響を与え（登録基準ii）、消滅した文化的伝統や文明の証拠を示し（登録基準iii）、人類の歴史上、重要な様式の建築物である（登録基準iv）ことを価値とする、ローマ帝国の国境線の登録について、ICOMOSは、将来的には、ヨーロッパだけでなく、アフリカやアジアの国々まで広げる支援を行おうとしている。2カ国から始まった試みが、多くの国々に拡大していくことは、国境を越える遺産の本来のあり方といえるだろう。

©PPS通信社 A



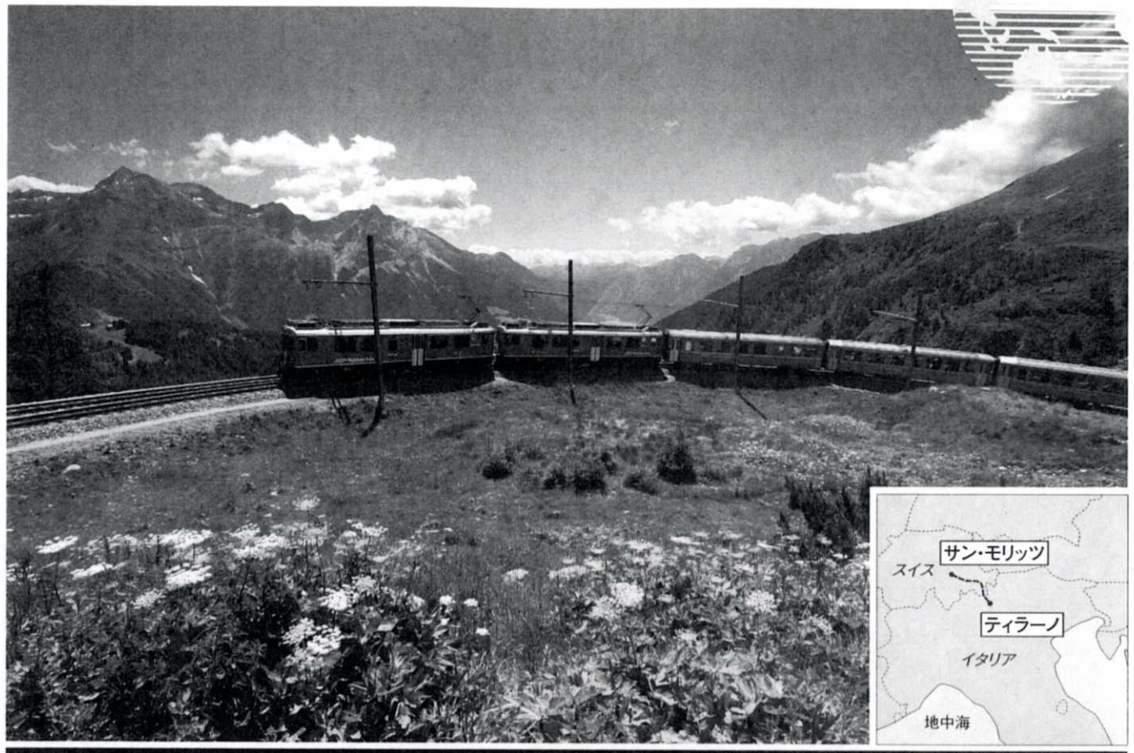
©PPS通信社 B

©PPS通信社 C



A イギリスのハドリアヌスの長城。全長は約120kmに及ぶ。
B ローマ帝国の国境線の一部として登録されたリーメスの遺跡。
C 2008年に追加登録されたイギリス内のアントニヌスの長城。

©corbis / amanaimages



スイス国内のサン・モリッツからイタリアのティラーノを結ぶベルニナ線のスイス国内、ヴァル・ポスキアヴォ渓谷近く。ベルニナ線は、429〜2253mの標高差を走るため、4000m級のベルニア山などの名峰から氷河、葡萄畑まで窓外の景色の変化に富んでいる。

自発的な大規模組織が功を奏した「レーティシュ鉄道」

互いの遺産の保存管理のため、大規模な組織作りに取り組んでいるのは、2008年に世界遺産に登録された、「レーティシュ鉄道アルブラ線・ベルニナ線と周辺の景観」である。これは、鉄道という「線」の遺産が国境を越える例でもある。

オーストリアのゼメリング鉄道やインドの山岳鉄道群に続いて、鉄道の遺産としては3例目になるこの路線は、スイスとイタリアを結ぶアルプス山岳鉄道。レーティシュ鉄道のアルブラ線とベルニナ線は20世紀初頭に開通したスイス最大の私鉄である。そのうちベルニナ線の終着点がイタリアにある。両鉄道とも、アルプス山間部の社会経済に大きな影響を与えたと同時に、中央アルプスの集落を孤立から守る模範的事例となった。その結果、スイスアルプスを通過する歴史的に重要な鉄道路線として、鉄道および周囲の文化的景観の価値が認められ、世界遺産に登録された。

この遺産の特徴は、3段階のバッファーゾーンによって保護されている点である。第1バッファーゾーンとは、資産に近く、文化的景観を構成するゾーン。第2バッファーゾーンは、第1バッファーゾーンよりは狭いが、資産価値に直接関係しない都市や田舎の住宅地も含まれる。第3バッファーゾーンは、鉄道から見える範囲の景観や環境を含むゾーンである。

この広範にわたる地域の保存管理を担うのが、スイスとイタリア共同の国際組織である。この組織には、国家、地域、自治体、鉄道会社の代表者も含まれており、財源やさまざまな計画立案に携わっている。また、将来的な資産調整に関する情報伝達を担う組織の設立も進行中である。

このような大規模な組織体系のもと、遺産の保存管理が徹底して行われていることは重要視すべき点である。

しかし、鉄道の技術史や鉄道建設にともなう社会史をいかに住民に説明していくかという点においては、まだまだ改善の余地があり、次なる課題となっている。

「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」の巡礼路に見る困難

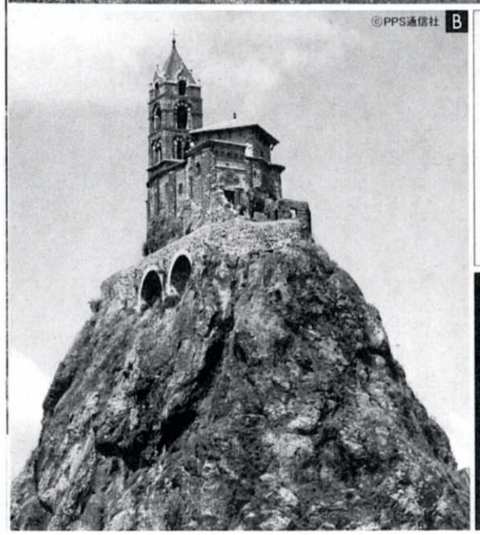
これまで取り上げてきた遺産と同様、同一の歴史性をもちながら、二つの物件として別々に登録され、依然、二つの国境を越える遺産として成立する気配の見えない遺産がある。キリスト教の聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路がそれである。1993年にスペイン国内の巡礼路が登録され、1998年に、フランス国内の巡礼路が別件として登録された。

スペイン国内の遺産は、ピレネー山脈からサンティアゴ・デ・コンポステーラの町まで、五つの自治州と166の町村にまたがる1800の歴史的資産と連続的な文化的景観が登録対象となっている。一方、フランス国内の遺産は、巡礼路にあるおよそ800の資産のうち、69の歴史的資産のみが登録されている。ここでは、連続する道などは構成要素に含まれていない。

ICOMOSは、1993年にスペインの世界遺産登録が決定した際、関係国に対し、「スペイン国外への登録拡大の可能性を考慮する必要がある」と伝えた。ICOMOSは両国が「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」という一つのくくりのもとに登録するよう、本格的な検討を求めたのである。

しかし、中世の終わりからスペインとフランスが経てきた歴史と経済発展の違いは大きく、巡礼路そのものは、フランスよりもスペインのほうが、はるかに広範囲に保存されていることもあって、結局、2カ国は別々に登録することになってしまったのである。

©PPS通信社 A


©PPS通信社 B

A スペインの巡礼路にある、プエンテ・ラ・レイナ。この町で、ピレネー山脈を越えた2本の巡礼路が合流する。
B フランスの巡礼路上にあるル・ピュイの岩山にあるサン・ミシェル・デギュイユ礼拝堂。

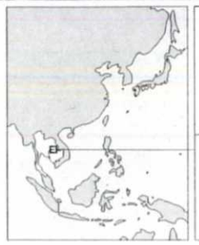
文化交流が支える国境を越える遺産の未来

2008年に登録された「プレア・ヴィヘア寺院」は、国境を越える遺産の新たな問題を浮き彫りにした。

切り立った崖の縁に立地するプレア・ヴィヘア寺院は、カンボジア領内に位置するが、参道や寺院の境内はタイ側に広がっており、カンボジア側から直接寺院にアプローチすることはできない。本来ならば、両国による申請や保存管理計画の立案も考えられたところだが、結果的にはカンボジア領内部分のみの申請となった。これによって、国境が確定していない地域での紛争に火をつけた形となり、10月に入って、両国軍の武力衝突も伝えられている。人類の融和に役立つはずの文化が、2カ国間の紛争を助長するという残念な結果になってしまった例である。

このように国境を越える遺産は、関係国の協調の契機にもなりうるが、一歩間違えると民族間の問題や国境問題を再燃させる火種ともなりかねない。そうならないよう、文化の交流を根気強く続けることが重要なのである。

©PPS通信社



プレア・ヴィヘア寺院は、高さ547mの崖の上にあり、真下にはカンボジア平原が広がる。